

---

# 私と年下王子さま

橘 亜衣

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

私と年下王子さま

### 【Nコード】

N6916Z

### 【作者名】

橘 亜衣

### 【あらすじ】

異世界出身の、香山絵里（21）。そんな彼女に突然結婚話が持ち上がった。だけどお相手はなんと、14歳の王子様！王族、とか王子様、とか、結婚とか以前に、14歳！？ってことは、中学生！？7歳も年下の旦那様だなんて、絶対に無理！！かといって断ることもできず、彼女は王子のもとに嫁ぐことになりました…。

## 00 親愛なるお兄様へ

『拝啓、日本のお兄様。』

私があなたの元を去って2年経ちますが、元気にやっていますか？  
私はそれなりに元気にやっています。

2年前のあの日、大学の講義中にうたた寝をして、気付いたら異世界に飛ばされてた時はどうしようかと思っただし、これは夢だと必死に現実逃避もしました。

だけどそれは現実で。

知らない世界で生きる術のない私は途中、人攫いにあったり知らないおじさんに売られそうになったりしたけど、今は心優しい人達に拾われて、幸せに暮らしています。

拾ってくれたのはとある国の貴族の方で、子供がいなかった2人は私を実の娘のように可愛がってくれています。

幼いころに両親を亡くした私にとって、2人は間違いなく私の父親と母親という存在です。

いつかお兄様にも会ってほしいと思うけど、やっぱり住む世界が違うから無理ですね。

文字通り、世界、違うから。

そんな両親同然の2人のお願いに、私がどうして断れるでしょう。

実はこの世界、それなりの地位のある人は、20歳までにしかるべき相手に嫁がなければならぬという決まり事、のようなものがある。って。

如何せん、私の家はこの国でも有数の大貴族。

いくら私が養子で、実は異世界出身だといっても、結婚はしないと  
いけないみたいです。

異世界生まれはともかく。もう20歳過ぎてるんですけど、いいんですか？

なんて聞いたら、あなたは幼く見えるから大丈夫。と笑顔で言われました。

確かに、日本で大学生やってた頃から中学生に間違われるほどの童顔幼児体型だったけど。そしてそれから2年経った今とその頃と、大して変わっていないけれど。

…喜んでいいのか、正直微妙なところです。

どうやら私、17歳で通っているらしく、相手方にもそれで話をして  
いるから、と言われました。

うん、まあいいんですけど。

考えようによったら、若く見られるのは女性として喜ばしいこと。  
ここは素直に喜んでおこうと思います。

それで、問題は嫁ぎ先、なんです。

大貴族ということは、お相手はもちろんそれに見合った家柄ということ。

聞いてみたら、なんとこの国の王族でした。

はい、もちろん現国王様ではございません。

国王は御年57、もちろん妻である王妃様もご健在です。王様は王妃様一筋なので、愛人や側室を作られたり…なんてことは致しません。

ではなくて。

お相手はその国王様の3番目の息子、アレク王子様です。

王子様と結婚…生まれも育ちもここに来るまでは平民だった私が、まるでシンデレラ…いいえ、彼女も実は裕福な家の生まれなので、ちよつと違いますが。

とにかく、相手が王子様というのも十分驚愕の事実ですが、実は問題はそこでもありません。

実は王子様、現在14歳。

ええ、14歳です。

そして私の本当の年は、21歳。

つまり、21歳の私が、あろうことか14歳の王子様に嫁ぐことに

なつたのです。

## 01 嫁入りする前に、ある重大なことに気が付きました。

この世界での両親から、衝撃の事実を告げられてから一週間。

私は今、お城へと向かう馬車の中にいた。

えーと…、もう一回言っておこう。

結婚の話を告げられてから1週間。

なのに、既に私は今日から、王子様の婚約者として、お城に入ります。

…なんか、早くない？

だって普通は、こう、準備とか、色々あるものでしょ？

嫁入り道具のセットの準備とか、心の準備とかその他もろもろ。

それともこの期間の短さは、この世界では普通なの？

と聞くと、いや、早いと真顔で母様に言われた。

いいんですけどね、どうせ何週間経ったところで、腹はくくれないだろうし。

それに私の嫁入りセットは、おいおい家から送られてくるそうだし。

そんな訳で、実質この身一つで王子様の元へ向かっているんだけど。

私、ある重大な事に気が付きました。

なんで今！？って自分でツッコミ入れてしまうほど、初歩的な事実。けれど、それを聞かぬまま王子にお会いできない。

「あの、リースン、つかぬことを伺いますが」

すると、私の前に座っている、銀髪ツインテール美少女が「何でしょうか」と言った。

彼女は私についている侍女で、結婚しても一生お仕えます、という事なので、こうして彼女を連れて行くことになった。

性格はすごく面倒見が良くて、口ではなんだかんだ言いながらも優しい少女。

ただどさずがの彼女も、私のこの質問には呆れるんじゃないか…。

心に不安がよぎる。でも…って、ああもう、考えてる場合じゃないぞ、私！

私は勇気を振り絞ると、リースンにとある質問をした。

「私の嫁ぐ、第3王子アレク様って……誰ですか？」

その時確かに、時は止まりました。

リースンが驚愕のあまり、大きな目を更に大きく見開いて。

口は心なしに半開きで、まるで息がとまったかのよう。

うわあ、美人はどんな顔でも美人だなあなんて見惚れていると、はっと我に返ったのか。

きつと厳しい顔になると、私を険しい目で睨んだ。

「エリ様。今日は一体どういう日かご存知ですか？」

美人の怒りの迫力に。私はびくりと体をすくませた。

「う、はい。王子様に会いに行く日です」

「では、今はどういう状況かお分かりになりますか？」

「…今は、お城へと向かう真つ最中です」

するとリースンが、はああああ、っと、ものすごく呆れたように長いため息をついた。

「それで、アレク王子をご存じないとは、どういう意味なのですか？」

「えっと、だつてこの国には、第1王子と第2王子、それに第1王女様しかいないはずですよ？なのに第3王子って、一体誰のことなんだろう…って思いました……」

14歳って、元の世界でいえば、中学生じゃない！？反抗期真つ盛りの、学ラン着ているような。

どうしよう、そんな人と結婚するなんて、しかも7歳も年下だし、犯罪だよね！？

間違いなくロリコンだよね！？

…って、1週間混乱しまくっていたおかげで気付かなかったのだ。

第3王子様っていう存在を、私が知らないことに。

## 02 王子のことを、教えて下さい。

「……………」

む、無言の沈黙が怖い。突き刺さる視線が痛い。

ちらりとリースンの方を見ると、彼女は眉をひそめながら頭を抱えています。

その顔にはありありと、

(どうしてくれようかこの人は)

って、書いてあった。くつきりと。

これはきつと、結婚が決まったっていうその時に聞いておくべきこととで、お嫁に行く当日に尋ねることじゃない。

ほんとうに、この1週間錯乱すぎだよ、私。

やがて、ややあってリースンが口を開いた。

「そう、でしたわね…。考えてみれば、エリ様がこちらにいらしたのは2年前。でしたらアレク様のご存じではなくても仕方ありませんわ」

ちなみにリースンは、私が異世界からやってきた、って知ってる数少ない人間の一人。

この世界でそのことを知っているのは、リースンと、それから母様

と父様だけ。

「ですが、そういうことはもう少し早くお気づきになるべきですわ」「はい、すみません…。14歳っていう衝撃の年齢に思いのほか意識がいつてしまいました」

私はぺこりと素直に頭を下げる。

全くもって彼女の言う通りだから。

でもさすがに情報皆無状態でお会いするのはどうかと…。  
かといって今更ながらなこんなこと、リースン以外に聞けないし…。

って顔をしてたら、勿論リースンはきちんと教えてくれました。

ため息まじりに、だっただけ。

「この国には、エリ様をご存じの通り、お2人の王子とお1人の女王様がいらつしゃいます。ですが実はその下にもう1人王子がいるのです。それが第3王子アレク様…エリ様の嫁がれる方ですわ」  
「でも、私、知らなかったんですよね。それにそんな話も聞いたことがなかったですし」

他の王族の方はもちろん、知っていたんだけど。

だから王族に嫁ぐって聞いた時、てっきりそのどちらかの王子様だと思ってた。

でも考えてみたら2人とも、もう20は超えてるし。

しかも3番目の王子…って、え、誰それ？みたいな結論に至ったの

がついさっきだったという、なんとも残念な私の頭。

「アレク様はエリ様がこの世界に来られた2年前に、他国へ留学なさいましたの。それからこの国には一度も帰られておりませんわ。ですからエリ様をご存じないのも無理はありません」

なるほど、つまり私と入れ違いにここから出て行ったのね。

道理で知らないはずだよ。

それにしても、2年前…っていうことは、12歳かあ。その歳で、他の国に留学だなんて、たいしたものだよ、うん。

私が12歳の頃なんて…小学生でしょう？お兄ちゃんに夏休みの宿題を全部押しつけてたような、ダメダメ生徒の模範のような子供だったよ。

あの時は、まるまる一カ月分の日記を丸投げしてごめんね、お兄ちゃん。

それにしても、この国の王族はみんなそうなのかな？そんな、そんな年齢から留学とか。

そう聞くと、彼女は首を横に振った。

「そんなことはありませんわ。現に留学されたのは、アレク様だけですもの」

聞けばアレク王子、幼い頃から『神童』と呼ばれる程の切れ者で、その実力は王様をはじめとした城の者全員が認めるほど。

もっと彼の才能を伸ばすため、そして更なる知識を増やし、見聞を広めることは、将来国を背負って立つ国王としては必要な事だろう。ということ、満場一致で12歳という年齢ながら他国へ行ったそう。

「……って、ちょっと待って下さい」

今、あっさりと聞き流せない単語を耳にしたような。

知識習得のため、見聞を広めるため。それは分かった。

けれどその後。

将来国を背負って立つ、『国王』

だって、第3王子でしょう？3番目でしょう？後を継ぐのは、こういう時、普通は長男である第1王子なんじゃないの???

「いいえ、この国の王位第1継承権は、アレク様ですわよ？」

聞き間違いであってほしい。そんな私の願いをあっさりと砕くように、リースンはきっぱり言い切った。

私が、なぜ、なんて聞く間もなく、リースンは理由を口にする。

「だって神童ですよ？それに、その歳で、既に国政の一部を担っ

ていたのです。次期国王として、これほど相応しい方はいらっしや  
いませんわ」

え と、……つまり、私の旦那様は未来の王様で、私はそんな  
方の妻。

それって、私が次期王妃っていうこと、なんでしょうか……？

私の顔に浮かんだ疑問を読み取ったのか、リースンはこくりと頷く  
と、

「その通りですわ」

そう答えた。

……どうやら私は、年齢差に気を取られ過ぎていて、とても大変  
な立ち位置に立たされていることを、今更ながら認識致しました。

02 王子のことを、教えてください。 (後書き)

肝心の王子様が出てくるのは…もう少しだけ、先です。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6916z/>

---

私と年下王子さま

2011年12月25日01時45分発行